

大名屋敷と鷹場^{たかば}

戸越屋敷^{とごえ}

寛文2年(1662)、熊本藩^{くまもとはん}(現在の熊本県熊本市周辺)細川家は幕府から土地をもらい、そこに屋敷を建てました。馬場で東西の庭園に二分され、



東は建物からの眺望を重視した庭園、西は散策を目的とした庭園で、同11年(1671)に完成しました。この模型は、現在の戸越公園^{とごし}(東京都品川区豊町^{ゆたかちょう}2-1)を含む東の庭園(約11万㎡)を復元したものです。

江戸近郊六筋の御鷹場^{ろくすじ おたかば}

江戸時代、品川地域には将軍の鷹狩場^{たかがりば}がありました。鷹を放って鳥や小動物を捕獲させる鷹狩は、生類憐みの令^{*}が出された時期を除き、盛んに行われました。享保10年(1725)に江戸周辺の鷹場が再整備され、江戸から約20km四方の村々が6つの地域(六筋)に分けられました。品川区域の村々は、それらのうちの目黒筋^{めぐろすじ}という地域に属しました。

※生類憐みの令：貞享4年(1687)、徳川幕府五代将軍徳川綱吉^{つなよし}が発令した法令。生き物を大切にすることを命じました。

とうかいじ
東海寺に伝来した古墳の出土品

大名屋敷が多く設けられた御殿山周辺は台地になっており、かつて古墳があったことがわかっています。東海寺の記録には、嘉永7年(1854)に品川沖に^{だいば}台場を築造する



際に、埋め立て材料の土を取るため丘陵を切り崩したところ、遺物が出土したことや、文久2年(1862)にイギリスの公使館を建設する際、古墳の石室や人骨が出土したことが記されています。展示資料は、来歴こそ明確ではありませんが、それらの発掘に関連するものと考えられます。

おおえま
大絵馬※

著名な絵師に描かせた大絵馬を、寺院や神社に奉納する習慣は^{むろまち}室町時代中期(15世紀中期)に起こりました。江戸時代初頭(17世紀前期)までは、大絵馬の奉納者は裕福な商人などに限られていましたが、江戸時代中期(18世紀前期)以降、庶民にまでその習慣が広がりました。^{はたがおか}旗岡八幡神社、^{とごし}戸越八幡神社、^{かいうん}海雲寺など区内の多くの寺院や神社には、奉納された大絵馬が多数残されています。

※絵馬：板に馬を描き、寺社に奉納したもの。馬は神聖なものと考えられ、古くは本物の馬を奉納していましたが、次第に馬の模型を奉納するようになり、やがて絵馬となりました。

1_06_01



西洋犬の骨格標本

万治3年～正徳元年（1660～1711）頃
昭和62年（1987）仙台坂遺跡（東大井）
出土

仙台藩（現在の宮城県仙台市周辺）伊達家^{だて}の屋敷（現在の東京都品川区東大井4丁目）の外堀に埋葬されていた西洋犬のうちの一体で、シェパードよりやや大型のオスです。第3代藩主伊達綱宗^{つなむね}が隠居していた時期の飼い犬と考えられています。成犬ですが、歯がすり減っていないので、柔らかい食べ物を与えられて大切に飼われていたと考えられます。こうした西洋犬の骨は、仙台藩上屋敷跡（東京都港区の汐留遺跡）でも出土しています。

1_06_02

すえき たかつき
須恵器 高坏

古墳時代中期* 6世紀前半
東海寺所蔵 当館寄託

食べ物を盛るために作られたと考えられている器です。

※古墳時代：およそ3世紀から7世紀にかけての時代。古墳時代は、大型の古墳が多く築かれたことに由来します。

1_06_03



えんとうがたはにわ
円筒形埴輪

古墳時代後期 6世紀後半
東海寺所蔵 当館寄託
円筒形埴輪は、古墳の周囲に並べられました。これは、その一部です。

1_06_04



須恵器 ていへい
提瓶

古墳時代中期 6世紀中葉
東海寺所蔵 当館寄託
液体を入れて持ち運びました。

1_06_05



東海寺境界石

17 世紀以降

江戸幕府三代将軍徳川家光が、禅宗^{いへみつ ぜんしゅう}※の僧侶・沢庵宗彭^{たくあんそうほう}を招いて建立した東海寺に設置された、安山岩^{あんざんがん}でできた境界を示す石。石垣などに使用される石材と同様に、四角錐状^{しかくすい}に加工されています。江戸時代、広大な東海寺領の境界の要所に設置されていたものの一つと思われます。

※禅宗：座禅によって悟りを開こうとする仏教の宗派。

1_06_06



旗岡八幡神社大絵馬^{はたがおかはちまんじんじやおおえま}（複製）

原資料：旗岡八幡神社所蔵

品川区指定文化財

元治元年（1864）10 月、中延村^{なかのぶ}の竹屋吉治郎^{たけやきち じろう}が奉納した大絵馬。土佐国^{とさのくに}（現在の高知県）出身の沖冠岳^{おきかんがく}によって、猿が寺社に奉納する馬を引く様子が描かれています。